高校生・大学生と連携した学びの場づくり

人と自然の博物館では、これまで兵庫県立大学附属中学校でのプロジェクト学習の支援や県内の高校を中心とした探究活動の支援に取り組んでいます。また、学芸員養成を目的とした博物館実習の受け入れに加えて、近年では関西学院大学（神戸三田キャンパス）の学生（以下、関学生）等を中心に博物館へのインターンの受け入れを積極的に進めています。ここではそうした高校生や大学生の学びが、博物館でのセミナーやイベントの企画・実施につながった例を紹介します。

写真１　「もったいない」ものを使ったクレヨンづくりセミナーのようす

兵庫県立三田祥雲館高等学校（以下、三田祥雲館高校）では、高校2年生たちが探究授業を通じて野菜の廃棄部分や駆除された外来植物等を有効に活用できないか、ということをテーマに1年以上にわたり探究を続けてきました。その中で、駆除されたオオキンケイギクの花びらや出荷の際に廃棄される大根の葉、ミカンの皮、コーヒーのかす等を使ってクレヨンを作ることを思いつきました。色ノリや発色、持ちやすさ等の点で工夫を重ね、さまざまな「捨てられてしまうもの」や「やっかいもの」からできた色の素材から10色近くのクレヨンを完成させました。そして8月5日には、自分たちの経験をもとに、クレヨンづくり体験の提供を通じて、身近にある「もったいない」ものに目を向け、環境配慮や持続可能な開発について来館者とともに考える機会として、セミナーを開催しました（写真1）。学生たちにとって、このセミナーは研究成果の発表の場でもあります。三田祥雲館高校と当館は2003年以来、連携協定を締結しておりますが、高校生が講師となり、一般来館者に向けセミナーを開催することは初の試みとなりました。

博物館に興味を持ち、夏休みを使ってインターンに来てくれた関学生は、博物館が大学生にとっても活用できる場所であることを知ってもらいたいという思いから、率先してイベントを企画・実施してくれました（写真4）。インターン期間中に、イベント等を実施したい関学生が知り合いにも多くいて活動の場を求めているにも関わらず、キャンパスの近くに博物館があることを知らない、また博物館をそのように使うことができることを知らない学生が多いということに問題意識を持ったことがきっかけです。自身が高校のときの部活動で百人一首に打ち込んでいた経験を活かして、カルタを作り遊ぶ企画を考えてもらいました。ユニバーサルデザインも取り入れ、五感をフルに使った今までにないカルタ遊びとなりました。企画提案の後、自らで運営メンバーを集め、半年以上かけて構想を練り、詳細については研究員とも相談しながら実施しました。

両イベントとも、参加された方からは好意的な感想がほとんどだったことも印象的で、参加した子どもたちの満足感も高かったのではないかと思います。

プロジェクトを通じた実践的な学びや博物館での展示や研究員等から得られる専門性の高い学びとあわせて、博物館でのこうした取り組みを通じて、自身が学んだことを人に伝えることの難しさや面白さ、学びの場をデザインすることの苦労や意義といった、学習支援に関する実践的な学びを体感できる場としても博物館をさらに活用してもらえることが、博物館が社会や地域に果たす1つの機能として、大切であるように感じています。

人と自然の博物館では、こうした取り組みの支援も含むかたちで、今年度より新たに次世代タスクフォースというプロジェクトチームが立ち上がりました。成果はこれからですが、さらなる学習支援の強化と充実に向けて、機運を高めていければと思います。

衛藤彬史
（環境計画研究グループ／次世代タスクフォース）

写真２　作ったクレヨンをさっそく試してみる参加の子どもたち

写真３　ミカンの皮等からできたクレヨンの見本

写真４　関学生による五感を使ったカルタ遊びのようす

写真５　触感を頼りに中身を当てる参加の子どもたち